固有名詞（שם העצם）を取り巻くヘブライ語文法の断層

―17 世紀アムステルダムのユダヤ社会における三つの文法教科書－

手島　勲矢

1. ヘブライ語文法の変貌：ディクドゥークからグラマティカへ

現在、ヘブライ語文法の研究は、ソシュールなどの一般言語学の視点の進化にあわせて、通時と共時アプローチの違いを意識しながら、多くの地球上の言語の一つとして、おこなわれている。他方、ユダヤ教の中には、聖書が書かれた「聖なる言語」として追求されたヘブライ語文法の 1000 年以上の研究の伝統も存在している。その始まりは、10 世紀のサアディア・ガオンによってアラビア語で文法書と辞書が著述されたことにあり、それをうけて、11 世紀イベリア半島では、聖書ヘブライ語の文法「ディクドゥーク/דקדוק」が形成され、その研究蓄積は、12 世紀にはヘブライ語にされることで、キリスト教圏のユダヤ人にも広まる。

さらに 15 世紀末になると、ピコやロイヒリンなど、ルネサンスのフマニスト知識人らは、ユダヤ教の神秘主義に惹かれて、ユダヤ人教師から熱心に、ユダヤ伝統のヘブライ語文法を学ぶ一方、16 世紀の宗教改革の嵐の中で、ヘブライ語文法は、カトリックとプロテスタントの聖書解釈の論争の中で必須な知識となり、イタリアのパドヴァ大学、フランスの王立教授団、ルーヴァン大学やオランダ・スイス・ドイツ各地のプロテスタントの神学校で熱心に言語が学ばれる中、そのような人々（クリスチャン・ヘブライスト）は、積極的に、彼らのヘブライ語文法の知識「グラマティカ」をラテン語にして広め、ヘブライ語を読み書きできるカトリックとプロテスタントの学者が増える 17 世紀には、ヘブライ語聖書の言語とテキストの歴史論争が為されるまでになる。

だが、そのキリスト教徒たちのヘブライ語文法の興味も、19 世紀から 20 世紀にかけて、考古学の発展で、古代の失われた言語（アッカド語やウガリット語など）の粘土板が発掘され、古代の文字と言語が復元されていく中で、大きな比較セム言語学の一部として、文化史・宗教史の自然主義・世俗主義の視点の影響は避けられないものとなる。古代の多くの興味深い歴史言語学的な事実から、原セム語から様々なセム諸語に分岐していく

発展プロセスの推測・仮説が唱えられ、ヘブライ語文法の研究も聖書ヘブライ語の変化プロセスの解明努力へと変容していく。

しかしながら、聖書ヘブライ語を理解しようとする文法学者の努力の歩みそのものを相対化する歴史研究については、とりわけディクドゥークとグラマティカという、ユダヤ教徒とキリスト教徒の二つの文法の伝統の区別を意識する学術的な努力がまだ足りない。その注意不足は、文法知識は一つの共通の歴史プロセスを経て発展しているという予断からくる。だが、実際には、ディクドゥークとグラマティカが、二つの異なる文法理解であることはユダヤ教徒とキリスト教徒の文法書を比較すれば明白であり、その違いがどの様にして生まれ、どの様に両者は同化・混合し、また分離されたのか、その両者の歩みについての総合的な歴史研究は、管見ながら、ほとんど為されていないと思える。しかし、近代の聖書解釈の歩みは、ユダヤ教のディクドゥーク知識の受容を抜きに、またディクドゥークから独立したグラマティカを抜きにありえなかったことに疑問の余地はない。

本稿は、ディクドゥークとグラマティカの視点の違いの一例として、固有名詞つまり《シェム・ハエツェム（שם העצם）》をめぐる理解を取り上げる。中世のディクドゥークの名詞分類、とくに固有名詞とその他の名詞（普通名詞）の区別は、文法学者の重要な拘りのテーマであった。しかし、現在の聖書ヘブライ語の文法入門の中から、固有名詞と分類の議論はほぼ消えてしまっている[1]。その興味の消失の始まりは、既に 16 世紀後半、クリスチャンのヘブライ語文法グラマティカ（マルティーニ文法）に（おそらく最初に）認められ、それがブクストルフ文法、ゲゼニウス文法を経由して、現在の聖書ヘブライ語文法に至る流れが想像される。

しかし、クリスチャン・ヘブライストがユダヤ人のディクドゥークの翻訳紹介を始めた 16 世紀前半、シェム・ハエツェムをラテン語にどの様に翻訳するかで彼らの中でも混乱が生じていた。興味深いのは、その混乱の原因をたどると、12 世紀の文法学者アブラハム・イブン・エズラの名詞理解と、12 世紀から 13 世紀にかけて活躍するキムヒ家文法（父ヨセフ・キムヒ、兄モーシェおよび弟ダヴィッド・キムヒ）の名詞理解の分裂に行き着くことである。

そもそも固有名詞と普通名詞の区別は、二つの神の名前（エロヒムと神聖四文字）の違いとしても認識されるもので、この区別は聖書ヘブライ語の文法問題でありながら、名前と事物また実体との関係整理のアポリアも含む、哲学的な聖書解釈の問題にもなっている

[2]。文法理解において、翻訳において、シェム・ハエツェム（שם העצם＝骨の名前）を「固有名詞 nomen proprium」と理解する人たちと、それを「実体の名前 nomen substantiae」と理解する人々の両方が存在することは歴史的に不思議ではない。

当然ながら、名詞理解として、二つの翻訳矛盾がそのままで許されるわけがなく、当時のクリスチャン・ヘブライストの代表的人物、セバスチャン・ミュンスターは、ある種の解決を提案する（後述する）。だが、それによって長年の理解の衝突が解決されるわけもなく、この問題の根深さは、17 世紀のアムステルダムのユダヤ人教師たちが書き残した文法書の中にも刻印されている（スピノザはその中でヘブライ語を学んだ）。したがって、この固有名詞の問題は、その後のヨーロッパの知識人に及ぼす影響の観点、つまり、その後の世界観や言語観に影響を及ぼすスピノザの哲学と文法の関係の視点からも、尋ね考えられるべきであろう。

要するに、なぜ現在の聖書ヘブライ語文法のラムデンやジュオンの入門から、固有名詞と普通名詞の区別の議論が消えてしまったのかの現象を、ユダヤ教徒とキリスト教徒の神学の違いから説明することは可能だとしても、それ以上に、固有名詞と普通名詞の区別を取り上げないという消極的な現在の解決の仕方に行き着いた理由は、二つの名詞の論理的なギャップに対する十分な答えが存在しないからと答えることも可能であり、その点で、16 世紀以降のグラマティカ（つまりディクドゥークの再解釈）の転回は、17 世紀以降の新哲学や科学の発展にも、きわめて重大な影響を残しているのではないかというのが、正直な筆者の見立てである。

本稿の中心的な関心は、17 世紀前半のオランダ・アムステルダムのユダヤ人社会の 3 人の教師、彼らが残した 3 冊の文法書の比較考察、つまりイツハク・ウジエル（Isaac de Abraham Uziel: ? Fez-1622 Amsterdam）、メナセ・ベン・イスラエル（Menasseh ben Israel: 1604-1656）、イツハク・アボアブ（Isaac Aboab da Fonseca: 1605-1693）のシェム・ハエツェム理解の違いの分析である。北アフリカから来た教師ウジエルは、幼いメナセとアボアブにヘブライ語文法の手ほどきをした。彼に学んだ二人の少年は、その後、スピノザがヘブライ語を学ぶイェシバー（ユダヤ教のラビ養成学校）「エッツ・ハイーム」の教師となる。つまり、イツハク・アボアブはスピノザの破門に関わり破門状に署名する一人であり、メナセはそのとき海外にいたのだが、若い反抗的なスピノザにとって、彼はユダヤ教の師匠として慕われていたと思われている人物である[3]。

メナセもアボアブもポルトガルではコンベルソの家庭の子供として育ち、ヘブライ語はオランダに来てユダヤ教の信仰を取り戻すために新たに学び身につける第二の言語なので、そんな二人の書いた文法に現れるシェム・ハエツェム理解の相違は、17 世紀当時の、死人の復活の論争が盛んなアムステルダムのユダヤ人にとって、どの様な意味をもったのか？また自由意志を巡り激しい論争の中にあるオランダ改革派の中にあるユダヤ共同体にとって、ディクドゥークの固有名詞と普通名詞の問題は、教会のグラマティカの教師たち（マルティーニ文法やブクスストルフ文法を教える人々）と[4]、全く意味も軋轢も生まない認識であったのか？など、問題意識の広がりに限りはない。本論文は、グラマティカとディクドゥーク、二つのヘブライ語文法の伝統がもたらすヨーロッパ思想史への影響の可能性を考えるための準備である[5]。

2. シェム・ハエツェム問題：固有名詞 nomen proprium と実体名詞 nomina substantiae

16 世紀前半のグラマティカの混乱は、クリスチャンが最初に目にしたインキュナブラ時代の代表的文法書が 12 世紀文法学者モーシェ・キムヒ（M・キムヒ）の文法書「מהלך שבילי הדעת/マハラフ・シュビレイ・ハダアト（知識の小道を歩くこと）」(1488 年版)であったことも原因といえる[6]。つまり、ヘブライ語で書かれたユダヤ人の文法著作をラテン語に翻訳することによってのみ混乱が生じたというわけではない。というのは、M・キムヒ/レヴィータの文法は、確かにディクドゥークの要点を簡潔にまとめていて、クリスチャン・ヘブライストの間では、ラテン語で書かれたロイヒリンの初級文法（1506 年）よりも広く信頼を集め人気があった[7]。しかし、その大きなキムヒ文法の影響力だからこそ、伝統的なイベリア半島のディクドゥークの理解（アブラハム・イブン・エズラなど）と食い違うキムヒ家の文法の問題は看過できないものとなる。

その為もあり、16 世紀ヴェネチアのダニエル・ボムベルグ印刷所から出されたアブラハム・ベン・メイール・デ・バルメス（Abraham ben Meir de Balmes: 1440-1523）の文法書『ミクネ・アブラム/מקנה אברם』(1523-4 年）は、キムヒ家の 3 人の文法の見解を伝統的なディクドゥークに照らしながら、色々なポイント（母音記号など）で、キムヒ家文法のデメリットを批判する。中でも「シェム・ハエツェム／שם העצם」について、固有名詞と捉えるバルメスの文法と M・キムヒ文法との違いは看過できないほど大きい。

つまり、M・キムヒ文法が「シェム・ハエツェム」の具体例として挙げるのは、「地」

「天」「野原」「草」「太陽」「月」「パン」「肉」「葡萄酒」「水」「頭」「足」「耳」「目」に加えて、「息」「霊」「魂」も含まれている。つまり「シェム・ハエツェム」の実体は、目に見える存在もあれば、手で触れる物質的な存在もあり、そればかりか、さらには「息」など目には見えないものや「霊」や手で触ることのできないものも実体の名前「シェム・ハエツェム」に分類される。

当初、S・ミュンスターは、M・キムヒのシェム・ハエツェムを nomina substantiae と翻訳した（1531 年）[8]。それはミュンスターの判断でもあるが、M・キムヒが「シェム・ハエツェム」の名前とは「הם סימן לקריאת דבר נקראים שם העצם /それらは事物（דבר）を呼ぶための印であり、実体の名前と呼ばれている/sunt signum vocationis rei, appellantur nomina substantiae」と定義している所以でもある。もちろん、その「事物」「実体」という単数形の名詞からは、アリストテレスのカテゴリー概念も背後にあることが想起させられる。

対して、1523 年に書かれた文法『ミクネ・アブラム』は、バルメスがヘブライ語で執筆し、そこにラテン語訳が参照できる様に併置されているバイリンガルの文法書だが、そこでも「シェム・ハエツェム」には同じラテン語訳 nomen substantiae が採用されている。それを、バルメスは固有名詞のことであるとラテン語訳では理解されている。つまり、「שם העצם הוא השם היחיד מיוחד בלתי מתרבה（実体の名前は特化された単体の名前で複数化されない）」[9]というヘブライ語の定義について、下線部分のラテン語翻訳は「単数の固有名詞（nomen singulare proprium）」とされている。そして、複数化されない単数の固有名詞の意味とは何かを解説して、例えば、アブラハムという名前には複数形がない（複数化できない）というのである。

では、なぜ固有名詞に複数形は不可能なのか？バルメス文法では、 כמו אברהם שיורה על הנקרא אברהם בתנאי פרטיו ביחוד שלא ישתתף בהם אליו נמצא אחר「アブラハムの様に、つまり、それはアブラハムと呼ばれるものについて教えるのだが、彼アブラハムは、その独特の仕方で個々の諸条件の中にあり、彼アブラハムにとっての他者は、それらの（諸条件の）中に加わることはない」（ラテン語訳を見よ[10]）と解説される。つまり唯一な仕方でアブラハムだけの諸条件の中にある「個的な事物の実体」であるから、アブラハムと呼ばれる存在は、事実上、他と比較できない《上なる実体？》の唯一な「個的な事物」の話なのでもある[11]。つまり、だから固有名詞には単数形しかない、また定冠詞や人称所

有格をつけて限定することもできない等の、その他の普通名詞の概念から区別される特別ルールが固有名詞には発生すると教える。

J. クラツキンのユダヤ哲学辞典（エツェムの項目）によれば、中世のユダヤ哲学者は、ヘブライ語「エツェム（עצם）」を、アリストテレスの『カテゴリー論』10 個の哲カテゴリーの最初のカテゴリー「ウーシア（実体）」に対応させたという[12]。それは、全ての事物について認められるある種の共通土台（本質イメージ）でもある。基本的に、アラビア語で書かれた中世ユダヤ哲学の著作がヘブライ語に翻訳された時に、諸概念のイメージが形成されるのだが、ヘブライ語の翻訳者たちは、アラビア語では異なる語彙で区別されていた二つの概念「実体 substantia」と「本質 essentia」を区別せず両方とも同じ「エツェム」と翻訳した[13]。その「ハエツェム」の曖昧な二重のニュアンスのまま、ヘブライ語「実体の名前」が nomen substantiae と翻訳され広がることで、より問題が深刻化したともいえる。

興味深いのは、事物と実体を混同するユダヤ哲学者は、「実体」を「土台/本質/essence」の概念で考えて、定冠詞を伴う単数名詞（ハエツェム|העצם）で表現する人たちがいる一方で、「実体/עצם」は「事物/thing/דבר」と同じと見做して、複数形（|עצמים עצמות）で表現する人々も現れることである[14]。その点で、弟 D・キムヒは、彼の文法書『セフェル・ミフロール』で、兄 M・キムヒの「シェム・ハエツェム」のカテゴリーを「シェム・ダバル（事物の名前）」と呼び替えることは自然な展開であった。つまり兄モーシェが「シェム・ハエツェム」に挙げる具体例には、「実体（エツェム）」より「事物（ダバル）」という直截な唯物的イメージの名前の方が相応しいと考えた[15]。

他方、ユダヤ哲学者たちの中には（シュロモー・イブン・ガビロールやアブラハム・ベン・ダヴィッドなど）、アリストテレスのカテゴリー論の 10 の概念の最初のものが「エツェム」であって、それは残りの 9 つの述語的なカテゴリーの主語になるべきもの（＝それ自体）であり、他の 9 つの概念なしでも「実体／ハエツェム」は主語として、それ自体で存在しうると主張するものもいた。その場合「実体」は「本質」ばかりか「存在」の意義も含む。だから、やはり「事物」と「実体」の区別は、簡単なことではない。一般論の「存在」と考えるか、唯一無二な「存在」として考えるか、それによって「本質」の定義も変わってくる。

その点で、D・キムヒの文法（セフェル・ミフロール）にある「名詞は《身体》の様な

もので、それが色々な《場合》の主語となる。そして動詞は《場合》の様なものである」という記述は注目に値する[16]。後にレヴィータ文法が、名詞分類において、「実体」の概念を基本にして、時間に支配される状況や状態である「場合」の概念は「実体」抜きには考えられない存在の名前として「容姿の名前」を提案しながらも、他方、「実体」から切り離された純粋な「場合」のみの表現の可能性を、動詞の受動態分詞（パウール）に見出そうとする[17]。この区別は、「存在」としての「実体」そのものを明確にする努力であり、その点で、存在としての「実体」と場合としての「事物」の意味をどう区別するかは、「魂」と「身体」を考える上でもとても重要な問題である（この固有名詞の動詞化問題は後半で取り上げる）。

ディクドゥークにおいて固有名詞を考える視点の始まりは、アブラハム・イブン・エズラの『名詞論』にある[18]。彼は、神と人だけが固有名詞を所有していると考え、固有名詞と普通名詞の関係に、神の《唯一性》と《一般性》の関係を見ようとする。このイブン・エズラの見方を継承し、バルメス文法は、シェム・ハエツェム（固有名詞）としてのアブラハムを、世界の中で唯一の存在として考えている。

しかし、レヴィータ自身の『名詞分類（פרק המינים）』における「シェム・ハエツェム」は、次の様に説明されている（下記の引用はפרקי אליהו בכללים1527 年バーゼル版より；詳しくは手島ジェンダー論文 68-69 を見よ）。

״שם העצם והוא הנופל על פרטי המין האנושי אם זכר אם נקבה כמו משה ואהרון ומרים ודומיהם ובכלל זה שמות העירות והארצות וההרים והנהרות והימים והמדברות ודומיהם כמו עיר ציון ארץ צרפת הר סיני נהר פרת ים כנרת מדבר פארן ודומיהם״

「シェム・ハエツェムとは、雄であれ、雌であれ、人の種類の個に当てはまる。例えば、モーセとアロンとミリアムなどのように、また一般的に、町々の名前、土地や山の名前、川や海や砂漠の名前、つまりシオンの町、ザレパテの土地、シナイの山、フラテの川、キネレトの海、パランの荒野などのように」

興味深いのは、レヴィータのシェム・ハエツェムは「固有名詞」であるのだが、アブラハム・イブン・エズラの定義とは異なり、人だけでなく、町や砂漠や川などの一般名詞の事物も「固有名詞 nomen proprium」の範疇に入れている点である[19]。この点を見過ごして

はいけない。つまり、レヴィータは、M・キムヒの実体（=事物）の名前の定義と、イブン・エズラの固有名詞の定義を、固有名詞を一般化することで和解させようとしているともみえる。それに対して、バルメスの『ミクネ・アブラム』での固有名詞は、普通名詞（名詞分類）とは互いに相容れない、そこには根本的な認識の乖離があるものとして、シェム・ハエツェムを名詞分類のリストから除外している。

なぜ固有名詞とその他の名詞の種類は区別されなければいけないのかについて、イブン・エズラも、バルメスも、そのルールに言及しているが、レヴィータも４つの点を頭文字（סרכ״ו）で示す。１）スミフート：固有名詞にはニスマフ形はない。２）リヴーイ：固有名詞に複数形は存在しない。多数形しかない。３）キヌーイ：固有名詞は人称所有格接尾辞をとることはない、４）イェディア：固有名詞は定冠詞を取れない。こういう文法的な観察から、固有名詞（シェム・ハエツェム）と普通名詞（その他）は区別されねばならない。まさにアブラハム・イブン・エズラも、唯一の神の名前（YHWH）とエロヒム（一般名称の神の複数形）の名前が生み出す意味の違いとして、シェム・ハエツェム（固有名詞）の特殊性の認識を聖書解釈（レビ 24:15）にも応用する[20]。

固有名詞と普通名詞の文法的ルールが４点で区別するレヴィータの発想は、アブラハム・イブン・エズラも４つの違いで教えるので、５つの点で区別を数えるバルメス文法よりも伝統の文法に忠実に思えるが、バルメスの５つの区別の説明は、内容的にはイブン・エズラの理解と同じである[21]。むしろレヴィータの理解は、４つの区別に固有名詞の動詞化の否定を入れないので、その点で、イブン・エズラの説明から逸脱している。

この固有名詞の動詞化をめぐる見方の違いは、とても重要である。というのは、アダムの名前は、人間の一般の名前でもありながら、後にトーラーの物語の中で、最初の人の固有名詞にもなる。これを、どの様に理解するのかにも関係する。つまり、人は一般的なカテゴリー分類の対象でありながら、同時に、個々人は唯一の固有名詞の存在でもあるとは、どの様な意味で可能なのか？この哲学的・神学的な問題が関わっている。

その点で、レヴィータが固有名詞シェム・ハエツェムを名詞 13 種類の一つとして数える[22]時点で、彼の理解の中では、固有名詞の一般化に向かっている。それに対して、バルメス文法は、唯一である存在の名前として、名詞の６種類の一つにシェム・ハエツェム（固有名詞）を数えることも拒否する。この問題は改めてメナセやアボアブの文法について論じる時に考えたい。

3. ミュンスター文法：二つの翻訳の和解

シェム・ハエツェムの訳語の混乱について、ミュンスター自身は、自分のグラマティカを記述する上で一つの解決を提案している。それはレヴィータとキムヒ家の両方の名詞分類を考察した結果であるが、ここで 1543 年に発表された *Grammatica Hebrae Eliae Levitae Germani* の中より De Nomine altera orationis parte の冒頭を以下に引用する（出典の書誌情報については手島のジェンダー論文 70-71 を見よ）。

> Vocant Hebraei nomen proprium שם עצם ut sunt omina hominum, montium, fluviorum & caetera. Nomen vero substativum vocant שם דבר nomen rei. Et nomen adjectivum שם תואר id est. nomen formae. Et omne nomen vel est masculium vel foeminium. &pauca inveniuntur quae utrunque habent genus.
>
> 「ヘブライ人は固有名詞のことをシェム・エツェムと呼ぶ。ちょうど、それらは、人間の名前、山の名前、川の名前等のようなものをいう。実際、彼らは、「実体的な名前」を、シェム・ダバルつまり「事物の名前」と呼ぶ。そして「形容詞」とはシェム・トアルつまり「姿形の名前」である。そして、すべての名前は、男性的もしくは女性的であり、そして僅かだが、（男女）両方のジェンダーを持つものも見出される。」

当初、ミュンスターは、M・キムヒ文法の「シェム・ハエツェムשם העצם」を訳したときは「実体の名前 nomina substantiae」としたが、ここではレヴィータ文法の名詞分類に従い考え直し、「シェム・エツェム」を「固有名詞 nomen proprium」と再定義した。その上で、「事物の名前/שם דבר/nomen rei」に「（真に）実体的な名前 nomen vero substantivum」という新定義を与えた。こうして、これまでの二つのラテン語訳の混乱を、ヘブライ語用語とラテン語用語の組み合わせを変えることで、ミュンスターは解決を見出している。

つまり、問題は、「シェム・ダバル（事物の名前）」のヘブライ語用語について、モーシェ・キムヒは、目に見える具体例（大地、天、月や太陽、葡萄酒やパン、目や耳など）とともに、「息」や「魂」や「霊」など目には見えない名前も「ダバル」に含めた。この「事物 res」カテゴリーの問題については、既に指摘した様に、レヴィータが定義する

「ダバル」の具体例に、M・キムヒがシェム・ハエツェムの中に含めた「息」や「魂」や「霊」などは含まれていない点からも明らかである。つまりレヴィータは、魂や霊を「事物」とみなさないのである。そこで、そのレヴィータ文法を紹介するミュンスターは、従来のディクドゥークのラテン語用語にはない、新しい二つの名詞分類の概念「(真に）実体的な名前 nomen vero substantivum」と「形容詞 nomen adjectivum」を導入する（バルメス文法のラテン訳用語と比較せよ)。

これらの新概念は、ヨセフ・キムヒが提案する名詞の３分類（息子Ｄ・キムヒがさらに精密に理解を発展させている）を参考にしていると思われる。すなわち、M・キムヒの父ヨセフ・キムヒは、文法書『セフェル・ジカロン』で、１）人の目に見える存在もあれば、２）人の目には見えないけれども存在している、二つの存在の名前のカテゴリーを教え、さらに３）名前だけで実体が存在しないものがある、として、３種類の名詞カテゴリーを、存在の観点で教えている。

それを下地にして、ミュンスターの工夫は、バルメスが「実体 substantia」という名詞で作った用語（nomen substantiae）を、形容詞的な nomen vero substantivum「(真に）実体的な名前」というネーミングに作り替えた様に見える点である[23]。これによって、J・キムヒが考える１）と２）の両方（目に見えるものであれ、見えないものであれ、真に存在するもの）は、「真に実体的な名前」と統合的にみなした。つまり、目には見えないけど存在するとされる霊魂など非物質的なものも範疇の中に吸収するかどうかで混乱する「事物 res」の名前の問題を、「実体的なもの」という新しいラテン語訳で言い換えることで、「実体」と「事物」を区別する名前のレヴィータのダバル解釈も、目に見えないものも目に見えるものも存在に含むM・キムヒのダバル解釈も共存が可能になる。

そうなると、父ヨセフ・キムヒの 3)「人々が名前で語ることはできても、被造物ではないので、その名前には実際の実体はない」名前の範疇に対応するのは、ミュンスターの「形容詞 nomen adjectivum」ということになる。しかし、これをレヴィータが理解する「シェム・トアル/שם תאר/ nomen formae」と同一視することはできない。なぜなら、レヴィータにとっては、それは実体が含まれる概念なので、父ヨセフ・キムヒ文法の３）の説明とは矛盾することになる。ここは、より精密な分析（ヘブライ語文法の品詞とラテン語文法の品詞の対比）が求められる。

ミュンスターが提案する新概念 nomen adjectivum を、父ヨセフ・キムヒの第３分類に

従って理解されるべきとするなら、レヴィータの教えるシェム・ハトアル（姿形の名前）の定義とは違う種類の名前、つまり「実体」「存在」を含まない様態・状態のみの名前、それは、つまりレヴィータの「シェム・ミクレ/場合の名前/ שם מקרה」を意味することになる。それを、欧米の「形容詞（？）」の概念に相当するもの考えたのであるなら、これはミュンスターに始まるグラマティカの革新的理解の一つかもしれない[24]。

少なくともミュンスターの名詞論は、固有名詞も男女のジェンダーの区別を持つ事実を指摘して、その他の 2 種類の名詞とともに、固有名詞も同じ一般的な名詞の概念を形成していると喝破している点では、それまでのディクドゥークの名詞分類とは違う、新境地を開いている（手島のジェンダー論文の関連箇所 pp.76-79 を見よ）。

いずれにせよ、クリスチャンのグラマティカは、特にペトルス・マルティーニ（Petrus Martinius/Pierre Martinez or Martin: 1530-1594）の登場で、全く異なる説明の構造のヘブライ語文法に生まれ変わる。それまでの（「名詞 שם」「動詞 פעל 」「ミラー מלה 」の三要素で説明する）ディクドゥークは、17 世紀になると、「語源論 etymologia」と「文章論 syntax」の二分野でヘブライ語を解説する新しい文法「グラマティカ」へと変貌する[25]。このユダヤのディクドゥークから分離していくキリスト教徒のグラマティカは、ヘブライ語文法の近代化の基礎となり、その中で、固有名詞をめぐる様々な名詞分類の問題へのユダヤ的な関心は、ヘブライ語文法全般から姿を消していく。

4. メナセ・ベン・イスラエルの文法（1621 年）

メナセは、17 の時にポルトガル語でヘブライ語文法書を書いている。この文法知識はディクドゥークのそれであり、イツハク・ウジエルにヘブライ語をゼロから学び始めて得たもので、ウジエルが老年になり授業ができなくなると、メナセが代わりにヘブライ語の教師となったといい、そのメナセの講義メモが彼の文法書『サファ・ブルラー』である。当時のアムステルダムのユダヤ人子弟たちは、ヘブライ語授業の教科書を、自分の手で書き写した。メナセの文法もその様に普及したと思われる[26]。アムステルダムのユダヤ教学院《エッツ・ハイーム》には、1647 年当時の手稿の文法書が残っている[27]。興味深いのは、その後、メナセの文法とアボアブの文法は合本されて一冊の文法書として書き写されていることであり、今回の引用テキストは、イスラエル国会図書館所蔵の合本テキストからである[28]。メナセのシェム・ハエツェムの解説、文法書『サファー・ブルラー/ שפה

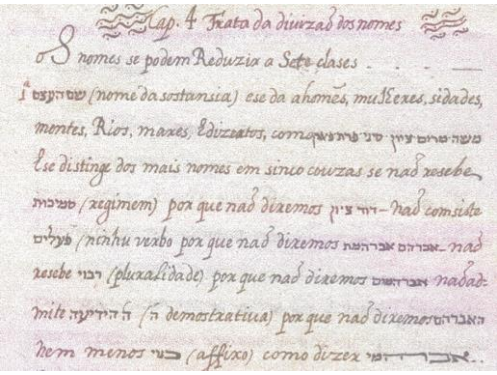
ברורה』第 2 巻第 4 章は以下の通り。

Cap. 4 Trata da divis(z)ao dos nomes

Os nomes se podem reduzir a(em) sete clas(s)es, 1) שם העצם (nome da substancia) Es(s)e da(e) a homens, mulheres, s(c)idades, montes, rios, mares,desertos, como משה מרים ציון סיני פרת פארן E se distingue dos demais nomes em s(c)inco cois (z)as se nao recebe סמיכות(regimem) porque nao diremos דוד ציון nao consiste פעלים(nenhum verbo porque nao diremos אברהמת אברהם nao rec(s)ebe רבוי (pluralidade) porque nao diremos אברהמים. הידיעה "ה(he demonstrativa) porque nao diremos האברהם nem menos כנוי(affixo) como dizerאברהמי

４章　名前の区分について

名前は 7 種類に絞り込める。1. שם העצם実体（substansia）の名前,これは男の名前、女の名前、町の名前、丘の名前、川の名前、海の名前、砂漠の名前。丁度、משהモーセ、מרים ミリアム、ציוּנシオン、סיניシナイ、פרתエフラト、פארן パランの様に。そして、これは 5 つの事柄で他の名前とは区別される。1）それはסמיכותスミフートをうけいれない。なぜならדוד ציון ダヴィッド・ツイヨン（シオンのダビデ）とはいわないから。2）פעלים 動詞化を受け入れない。なぜならアブラハム、アブラハムター אברהם, אברהמת（彼はアブラハムした、あなたはアブラハムした）といわないから。また 3）רבוי 複数形も受け入れない。なぜならאברהמים アブラハミームと言わないから。また 4）ה"הידיעה ヘイイェディア定冠詞を認めない。なぜなら האברהם ハ・アブラハムといわないから。5）כנוי 人称所有格接尾辞も認めない。אברהמי アブラハミー（私のアブラハム）というような。


Cap. 4 Trata da diuizaõ dos nomes

Os nomes se podem Reduzir a Sete clases . . . —

שם העצם (nome da sostansia) ese da ahomẽs, mulẽeres, sidades, montes, Rios, maxes, ẽdizertos, como משה מרים ציון סיני פרת פארן

E se distingẽ dos mais nomes em sinco couzas se naõ resebe

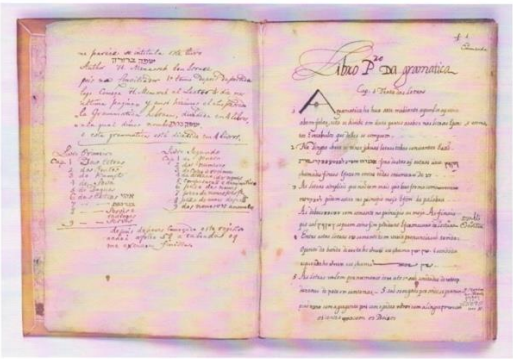
סמיכות (regimem) por que naõ diremos דוד ציון – naõ consiste

פעלים (nenhu verbo por que naõ diremos אברהם אברהמת – naõ

resebe רבוי (pluralidade) por que naõ diremos אברהמים naõ ad-

mite ה הידיעה (ה demostratiua) por que naõ diremos האברהם

nem menos כנוי (affixo) como dizer אברהמי..


Libro P.ᵉ da gramatica

右（当該テキスト）左（書名שפה ברורהと第 1 巻第 1 章の冒頭章）

メナセは、7種類の名詞[29]の中の一つに、シェム・ハエツェムをかぞえる。彼は、明示的に「固有名詞 nomen proprium」と呼んでいないけれども、実質的にはレヴィータ文法の固有名詞の定義をそのまま採用している[30]。ただ、レヴィータ文法の解説に大枠で従いながらも、メナセは5つの点で固有名詞（シェム・ハエツェム）を他の名詞から区別せよと教えるので、レヴィータが教える4つの固有名詞の区別（前述・頭文字ס"רכי）の原則からは逸脱する。

このメナセの逸脱は、レヴィータが区別に数えない、固有名詞は動詞化できないというポイントを、メナセが区別に数えるからであるが、実は、レヴィータは、「固有名詞から動作を導き出すことはできないという一点において、シェム・ハトアル（姿形の名前）とも、シェム・ハポアル（動詞の名前）とも異なるのが、シェム・ハエツェムである」という指摘を、シェム・ハエツェム定義の解説の最後で述べている。にもかかわらず、レヴィータは、固有名詞の特徴の一つに数えない。しかし、メナセは、動詞化の否定を固有名詞の特徴に数えた。このメナセの理解はイブン・エズラの名詞論とバルメス文法の立場と一致する。

イブン・エズラとバルメスは、分類に含むことのできない固有名詞の唯一性にこだわった。それ故に、動詞化できないという固有名詞の区別を重要視したと推理できる。つまり、バルメスは、アブラハムとは「単数の固有名詞（nomen singulare proprium）」であり、その単数の固有名詞は、「他の存在が一緒になることができない、その彼特有の個的な条件の下にある個的な事物の実体（substantia rei individuae）」を指す名前である。だから、固有名詞の動詞化できない（彼の行動を一般化することはできない）ものと考えた。だからバルメスは、固有名詞の唯一性にこだわる時に、固有名詞を一般化された名詞分類の6種類の中に数えずに、切り離して、別個に解説したのである。

とはいえ、レヴィータと同様、メナセも、すでに固有名詞を名詞分類の種類の一つに数えることを受け入れる点においては、唯一性や固有性の存在の名前としての固有名詞を、相反するものとして、バルメスの様に、厳密に一般性と切り離し区別することに固執するわけでない。確かに、レヴィータの固有名詞の定義も、人間だけでなく地名の固有名詞も考慮するので、固有名詞を普遍性・一般性の中に位置付けようともしている。

加えて、レヴィータの実証主義的な批判精神も、固有名詞の一般化に傾く判断に寄与している様に思われる。なぜなら、レヴィータは、名詞と動詞の関係の観察において、聖書

を全て調べ尽くしたという明確な確信がない自分を意識している[31]。名詞分類の議論でレヴィータが全体を通じて主張するのは、名詞と動詞の関係にはグレーゾーンがあり、必ずしも一方的な関係性で（動詞から名詞が派生するとか、名詞から動詞が派生するとか）語れないという慎重さである[32]。それが、レヴィータをして、固有名詞は動詞化しないと断言することに躊躇させたのかもしれない。レヴィータの文法は、ヘブライ語の観察に基づいての反証可能性を無視しない特徴があるが、その客観的な姿勢は若いメナセにも大事なことだったのだろうと想像する。

5. イツハク・ウジエルのディクドゥーク（1627 年）

メナセ・ベン・イスラエルは、アムステルダムでの初めてのユダヤ人の印刷所を設立した人でもある。彼はユダヤ教の祈祷書やいろいろな書物を出版した。その為に時限的に破門の憂き目にも遭う。初期の出版物の中に、彼にヘブライ語文法を教えてくれた師匠イツハク・ウジエルの文法書がある。それはウジエルの死後すぐに書籍化したもので『セフェル・マアネ・ラション（ספר מענה לשון）』という[33]。基本的に、メナセ・ベン・イスラエルも、イツハク・アボアブも、ヘブライ語を知らないコンベルソの家庭の子どもたちであり、彼らはアムステルダムに移住（避難）してきて初めてヘブライ語文法を学習したのである。そのため、ウジエルは授業をヘブライ語でするのだが、メナセもアボアブも母国語がポルトガル語であったために、二人には翻訳の助けが必要だった場面もあったと思われる。ウジエルの文法書の最後には、ヘブライ語とスペイン語の文法用語対応リストが追加されている。以下に、シェム・ハエツェムに関わる箇所を引用する（メナセ・ベン・イスラエル発行所版＝イスラエル国立図書館データより[34]）。

חלקי כל לשון הראשונים הם שלשה וסימנם שפ״מה רצוני שם פועל מלות הטעם : גדר השם הוא מה שיורה על ענין ולא על זמן. מאיזה מין שיהיה ונחלק לד״ראשים, שם העצם, שם התואר, שם היחס, ושם העצם שמים ארץ נשמה ודומיהם. שם התואר צדיק רשע חכם סכל. שם היחס ישראלי עברי מצרי אדומי. שם המספר אחדים עשרות מאות אלפים רבבות

全ての言語の主要部分（要素）は三つあり、それらは「シャプマ」で表される。これで私が意味することは、シェム（名詞）、ポアル（動詞）、理由のミラー（詞）である。名詞の定義は、意味については教えるが、時間については教えないもの（品詞）である。

そしてどんな種類の名詞であれ、名詞の主要部分は 4 つに分類される。シェム・ハエツェム（実体の名前）、シェム・ハトアル（姿形の名前）、シェム・ハヤハス（系図の名前）、シェム・ハミスパル（数の名前）である。シェム・ハエツェムとは、天、大地、魂などである。シェム・ハトアルは、義人、悪人、賢者、愚者。シェム・ハヤハスは、イスラエル人、ヘブライ人、エジプト人、エドム人。シェム・ハミスパルとは、一、十、百、千、万。

（左の画像は当該テキストの部分。右の画像は表紙。「『マアネ・ラション/本当の答えの書』は、簡潔な仕方で学生たちにディクドゥークの知恵全般つまり名詞、動詞、ミラーを教えるのに最適で勧められる文書」とある。）

上記のメナセ文法と比べてわかる顕著な違いは、ウジエル文法のシェム・ハエツェムは、レヴィータの固有名詞ではなくて、M・キムヒ文法のシェム・ハエツェムつまり「実体の名前」として教えられていることである。なぜなら具体例の中に、「魂」を数えているのは M・キムヒ文法の証拠であり、ダヴィッド・キムヒ文法の「事物の名前」では「魂」や「霊」への言及はない。レヴィータ文法でも、事物（ダバル）の中に「魂」は含めない[35]。その点で、メナセやアボアブがウジエルから教わった文法のシェム・ハエツェムは、M・キムヒの定義に忠実なものであった。ちなみにウジエル文法はスファラディームの伝統にも忠実であったことは、彼のアクセント記号の名称から、またメナセとアボアブがカマツの母音記号の発音に 2 種類あることが教えられていることから明白である[36]。スピノザ文法には、これらの師匠たちのスファラディームの伝統の影響がはっきりと残されている。

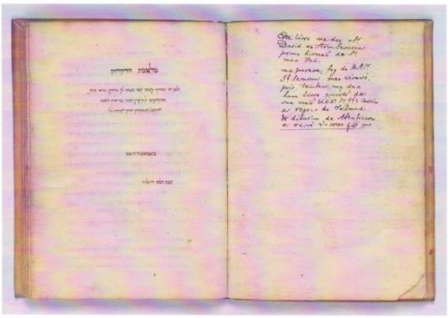
6. イツハク・アボアブのディクドゥーク（1642 年頃）

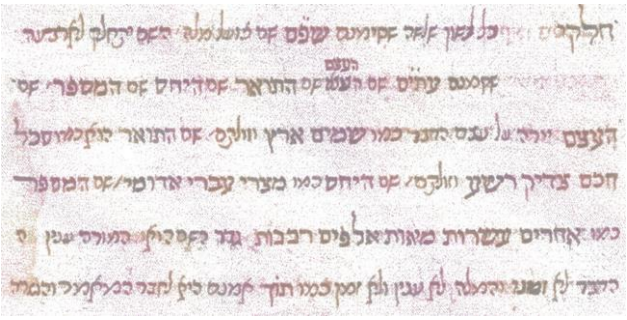
アボアブの文法書『メレヘット・ハディクドゥーク/ מלאכת הדקדוק』は、アボアブが

アムステルダムよりブラジルのユダヤ共同体に派遣されていた最中に書かれたもの思われる[37]。アボアブの文法は、メナセの文法と違い、師匠ウジエルの文法を忠実に受け継いで、M・キムヒのシェム・ハエツェム理解を提示している。しかし、実体の名前の解釈において、ウジエルは「魂」も実体の一部と認めて、具体例に含めているので、キムヒ文法の主張を完全に受け入れている。だが、アボアブは、「魂」をシェム・ハエツェムの具体例から除外している（ウジエルの記述と比較せよ）。確かに、アボアブは、「事物の実体」を教えるものがシェム・ハエツェムであると定義を明確化させている点で、アボアブにとって、「魂」は「事物」（つまり物質）とは違うとされても不思議はない。以下の関連箇所のテキストの引用はメナセ文法との合本された手書き写本から[38]。

חלקי כל לשון שסימנם שפ״ם: שם, פועל, מלה. השם יתחלק לארבעה שסימנם עת״ים: שם העצם, שם התואר, שם היחס, שם המספר. שם העצם יורה על עצם הדבר כמו שמים ארץ וזולתם, שם התואר הוא כמו סכל חכם צדיק רשע וזולתם. שם היחס כמו מצרי עברי אדומי. שם המספר כמו אחדים עשרות מאות אלפים רבבות. גדר השם הוא המורה ענין הדבר לא זמנו. המלה לא ענין ולא זמן כמו ״תוך״.

全ての言語の部分（要素）は、名前（名詞）、動詞、言葉（ミラー）、頭文字で略号にするとシャパム（שפ״ם）となる。名前（名詞）は次の 4 つに分かれる。それを頭文字で略号にするとエティム（עת״ים）となる。シェム・ハエツェム（実体の名前）、シェム・ハトアル（姿形の名前）、シェム・ハヤハス（血縁の名前）、シェム・ハミスパル（数の名前）。シェム・ハエツェムは、天、大地のような、「事物の実体」について教える。シェム・ハトアルは、愚者、賢者、義人、悪人のようなもの。シェム・ハヤハスは、エジプト人、ヘブライ人、エドム人のようなもの。シェム・ハミスパルとは、一、十、百、千、万のようなもの。名詞の定義は、事物の意味を教えるが、その時間については教えないもの。ミラーは「中に」の様に（前置詞は）事物の意味についても時間についても教えない。





（右の画像がテキストの部分、左の画像は手書きのアボアブ文法の表紙）

アボアブのシェム・ハエツェムの説明は、メナセの記述と比べて、師匠のウジエル文法に極めて忠実である。それは「名詞」「動詞」「ミラー（詞）」というディクドゥーク伝統の三部構造の枠組みを明確に守っていることである。それでもアボアブ独自の見解とも思える表現が認められる。ウジエルは、「名詞」を定義して単に「イニヤン（興味・関心）について教え、時間については教えない」としていたものを、アボアブは同じフレーズを少し修正して「名詞の定義は、《事物の》イニヤンについて教えるが、その時間についてではない」としている。この表現の補足はアボアブが付加したものであり、彼の実体の定義が事物の名前のそれと同じものであることを再確認させてくれる。

さらに「ミラー」の役割について、「関心・興味」でも「時間」でもない、文章構造（言葉のつながり）を表すものと定義され、また「動詞」の役割について、「興味・関心」についても「時間」についても教えると定義されている辺りは、前述のウジエル文法の叙述をそのまま踏襲している。だからこそ、名詞において、師匠の字面以上の解説をするアボアブの理解をみると、なぜアボアブは、シェム・ハエツェムの具体例としてウジエルが残していた「魂」を割愛したのか、アボアブ独自の理解があると見て取れる。

その点で、メナセの 7 つの名詞の種類にシェム・ダバル（事物の名前）が数えられているので、メナセのシェム・ハエツェム（固有名詞）の中身は、アボアブのような「事物・ダバル」と同じという理解ではあり得ない。ここに（魂の割愛に）筆者は、アボアブがより「事物」の側面を強調し、先行するメナセの文法の理解を批判して、アボアブ自身のシェム・ハエツェムの理解を明確に差別化したい意図を感じとる。もちろん、中世ユダヤ哲学の一部には、魂が人の実体であるという意見もあり、その点で、アボアブとメナセの文法がみせる「事物」「実体」の理解の違いは、当時の「死者の復活」の論争と、ある種の関連性があるという見方は考える余地ありというのが筆者の意見である。

7. おわりに：文法をめぐる二つの伝統

17 世紀において、科学と哲学の近代化に欠かせない唯物論的な関心の前進がなされたことは広く知られていることであるが、その点で、ユダヤ教内部のヘブライ語文法（ディクドゥーク）は、とりわけ名詞分類において、その物体と名前の関係を常に中世哲学の諸

概念「実体」「事物」「属性」他を背景にしながら追求されてきた側面がある。ある意味で、固有名詞と普通名詞の関係のアポリアに向き合うときに、ヘブライ語文法は、ギリシアの哲学（論理学）と聖典の言葉が互いに向き合うアリーナ（競技場）だが、その対決の緊張感は、クリスチャンのグラマティカの中からは、ラテン語文法などの影響で徐々に薄れていった様に思えるし、今のイスラエルのヘブライ語文法の中にも一般言語学の影響で、それは見出せない。だが、少なくとも、17 世紀のアムステルダムのユダヤ共同体のコンベルソたちが学ぶディクドゥークでは、その固有名詞と普通名詞の緊張感はそのまま維持されていた[39]。その点で、グラマティカとディクドゥークの関係は、単なる字義の瑣末な論争として解釈されるべきものではなく、より広い文脈においても、その意義は見直される価値のあるテーマであると筆者は主張したい。ヘブライ語文法の歴史は、人類の文明史を語る上で、欠かすことのできない一分野であると思う。（了）

---

[1] ゲゼニウス文法（E. Kautzsch/A. E. Cowley, *Gesenius' Hebrew Grammar,* Oxford 1910, p.401ff）の中には、中世の名詞分類への拘りに関する解説は存在しないが、固有名詞の特別ルールへの言及がある。息子ブクストルフ文法の名詞整理については注 33 を見よ。ジュオン文法には名詞の種類分類への言及はないが、固有名詞は定冠詞を取らず、また形容詞の修飾も直接にはできない事への言及はある（P. Juon= T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew,* Subsidia Biblica 14/II, 1991, p.505,522）。ラムデン入門文法（T. O. Lambdin, *Introduction to Biblical Hebrew,* Charles Scriber's Sons, 1971）も、名詞分類、固有名詞の区別ルールへの言及はない。もちろん Hans Bauer/Pontus Leander, *Hebraeäische Schulgrammatik,* Max niemey, 1933 にも言及はない。 極め付けはイスラエルの聖書ヘブライ語の権威ヨシュア・ブラウ文法でも言及はない（J. Blau, *A Grammar of Biblical Hebrew,* Otto Harrassowitz, 1976）。

[2] 手島勲矢「ユダヤ思想と二種類の名前」『宗教哲学研究』28 号、2011 年、pp.1-15。

[3] Steven Nadler, *Spinoza a Life,* Cambridge university press, 1999, pp.61-65. アムステルダムのユダヤ人の特殊な事情については、Edward Feld, "Spinoza the Jew," in: *Modern Judaism,* vol.9,No.1(Feb., 1989), pp.101-119.

[4] P. T. van Rooden, *Theology, Biblical Scholarship and Rabbinical Studies in the Seventeenth Century, Constantijn l'Empereur (1591-1648) Professor of Hebrew and Theology at Leiden*, Brill, 1989, の巻末 Appendix VI の書簡（pp.242-3）を見よ。

[5] この拙稿を尊敬する友人、芦名定道氏へ捧げる。京都ユダヤ思想学会の 10 年余りの学恩と友情への感謝としたい。

[6] Shimon Iakerson, "An Autograph Manuscript by Elijah Levita in St Petersburg," *StRos*38/39, pp.178-185.

[7] Stephen G. Burnett, *Christian Hebraism in the Reformation Era(1500-1660),* Brill, 2012, pp. 23-27.

[8] 以下の議論で用いられる 16 世紀の文法書レファレンスは、次の手島のジェンダー論文を参照せよ。手島勲矢「ヘブライ語文法のジェンダー問題：E. レヴィータと S. ミュンスターの時代」『Co*Design』7, 2020 年, pp.57-86.

[9] 『ミクネ・アブラム/*Peculium Abrae*/מקנה אברם』1523 年（ハーバード大学・ホートン図書館所蔵からの公式コピー個人所有）よりの引用。ヘブライ語本文に対応するラテン語訳は以下の通り、Nomen substantiae est nomen singulare proprium non plurificabile significans super substantiam rei individuae cum conditionibus suorum individuorum proprie, ut Abraham(実体の名前は特定の一人の名前であり、それは複数化されない名前であり、それは個的な事物の実体について意味し、それは独特な個々人の諸条件とともにある。丁度、アブラハムの様に)。ここで「上なる実体」のニュアンスがなぜ生じるのかについて、普通、奪格で受ける前置詞「～について」super に対格の substantiam で書かれていることへの考慮もある。もちろん前置詞 super は対格も取れるが、同時に significans の目的語としても理解でき、その時 super は前置詞ではなく実体の形容として「上なる実体」と読む可能性が出てくる。バルメス文法の翻訳はしばしばヘブライ語前置詞の**על**を翻訳せず割愛して対格で目的語を表現する。例えば、 המורה על השם היחיד בלתי מיוחד הוא דבר אחד は、Nomen singulare non proprium est significans rem una となっている。De divisione nominum および De nomine proprio の関係箇所を見よ。注 10-11 も参照せよ。

[10] これに対応するラテン語訳 ut Abraham quod significat vocatum Abraham cum conditionibus suorum individuorum proprie ne conveniat in illis ei ens aliud「アブラハムはアブラハムと呼ばれるものを意味し、アブラハムは、独特な個々人たちの条件とは、特有の仕方で一緒にならない、つまり、彼にとって他者であるそれらの人々と（彼は適合しない)」は厳密にはヘブライ語本文と同じではないが、要するに、他とはグルーピングできない唯一な仕方で固有名詞アブラハムは地上に存在することを示唆する。

[11] この「上なる実体」について、ユダヤ哲学者イツハク・ベン・シュロモ・ハイスラエリ（Isaac Israeli、10 世紀）がいう、הנפש הוא עצם משלים גוף טבעי「魂（ネフェッシュ）とは自然の肉体を完成させる実体である」という意見は、あたかも実体には 2 種類のもの、上位の実体（魂）と、事物である下位の実体（肉体）があるという主張に見えなくもない。参照：Jac Klatzkin, *Tesaurus Philosophicus Linguae Hebraicae et veteris et Recentioris,* pars tertia, [Hebrew],New York, 1968, p.154-155: יעקב קלצקין, *אוצר המונחים הפלוסופיים*, חלק שלישי は同書のヘブライ語タイトル。二つの実体としての「魂」と「身体」の関係からバルメス文法のעצם הדבר הפרטיを解釈するなら、ラテン語訳 Nomen substantiae est nomen singulare proprium non plurificabile significans super substantiam rei individuae「実体の名前」は、複数化できない特定の単数の名前（固有名詞）のことであり、それは「個の事物の実体について」意味する名前と普通は理解するが、「実体」と「個の事物」の区別を滲ませる significans の目的語「上位の実体（つまり魂)」としても読める。このニュアンスは、super は対格で書かれている「substantiam/実体/ עצם」を形容するという読みだけでなく、個別の「res 事物 דבר」に「下位の実体（つまり身体)」を

理解することからも出てくる。ヘブライ語表現הדבר הפרטי「その個的な、その事物」と定冠詞で限定して、すでに一個の事物の存在を示すが、その事物にさらに「実体」エツェムが存在するという時、これは、個々人の肉体に神がアダムの鼻から吹き込む「生命の魂 נשמת חיים」の存在があると仮定して理解可能になる、バルメスの固有名詞の定義の「実体」は、イスラエリーのいう「魂（ネフェッシュ）が自然の肉体を完成させる実体である」と見るなら、事物の存在の中に「上なる実体」があると読める。そして神から人間に吹き込まれる生命の息は、神の唯一性の魂の実体であるゆえに、他者の存在の条件とは一致しない唯一な存在とされるのである等々、理由を想像することも可能になる。

[12] 中畑正志訳「カテゴリー論」『アリストテレス全集』1、岩波書店、2013 年、18-19 頁。

[13] ヘブライ語翻訳者と二つのアラビア語概念の指摘は Jac Klatzkin, op. cit., p.154 の脚注を見よ。クラツキンは、スピノザのエチカのヘブライ語翻訳者としても有名であり、スピノザ用語をユダヤ哲学の観点から再解釈した翻訳とスピノザ哲学の解説を残している。

[14] Agacio Guidacerio はローマからパリの王立教授団に招聘された文法学者。彼はレヴィータとミュンスターのディクドゥークに対抗する意識が強く、クリスチャンのヘブライ語文法の必要性を述べる。彼の文法書もラテン語とヘブライ語訳の両方で著述されているが、彼の視点はギリシア語やラテン語の文法整理に従ってヘブライ語文法も著述されるべきだと考えている。彼の文法は、エツェムも他の名詞（ハハム）と同じ様に単数形と複数形で活用できると考えている。

[15] つまりダヴィッドは、事物の名前の具体例として、男、女、石、葡萄、馬、ロバ、木、鉄などを取り上げながらも「魂」「息」「霊」などを含めない。彼は、兄のハエツェムの名前の定義が、「事物」を呼ぶための記号と考えている以上、名詞分類において、「事物」と「実体」の範疇を分離し純化する必要を覚えたと見える。

[16] ספר מכלולラトナー版　1b、 ואכתוב שער דקדוק הפעלים בתחלה ואף על פי שהשם קודם לפעל כי הפעל יוצא מהשם. ואמרו כי השם כמו גוף נושא המקרים והפעל כמו מקרה.　「私は最初に動詞の文法の部を書こう。たとえ、動詞は名詞から派生するので、名詞が動詞に先行するのだとしても。人々は言う、名詞は「場合」を運ぶ身体の様なものであり、動詞は「場合」の様なものだとしても」主語として名詞が主体となり、動詞は述語であり、名詞に従属するものという見方がイベリア半島の文法では主流であった。

[17] レヴィータの名詞分類における、「姿形の名前（シェム・ハトアル）」の定義は、現在の文法がいう単純な形容詞 adjectivum のそれではなく、「場合」と「実体」が分離関係ではなく一致していることが求められる。つまり肉体という実体と知恵の場合が一致しているものが「賢者」であり、「悪人」は人の肉体の中に「悪」という場合がある状況をいう。それに対して「場合の名前」というものをレヴィータは分類の中に数える。それは、肉体の動作の実体がなく、作用だけの状況を魂の中で感じるものでしかありえない名前として説明する。彼の「場合」の説明は M・キムヒ文法の注解として、過去分詞（パウール）と関係づけられている。詳しくは手島のジェンダー論文（pp.70-75）を見よ。

[18] イブン・エズラの名詞論の固有名詞については、注 2 を見よ。宗教哲学研究の「二つの名前」論文、前掲書 に詳しい。

[19] レヴィータの『名詞分類（פרק המינים）』にもミュンスターのラテン語訳がついてい

て、ここではミュンスターは nomen proprium と訳している。

[20] 手島勲矢「ユダヤ思想と二種類の名前」前掲書 p.8 も見よ。

[21] イブン・エズラの名詞論テキストについては、Raphael Jospe, *Jewish Philosophy in the Middle Ages from Sa'adiah to Maimonides*, unit 5, The Open University of Israel, 2006, pp.172-173 :רפאל ישפה, *פילוסופיה יהודית בימי הביניים מרב סעדיה גאון עד הרמב"ם*, כרך ב. האוניברסיטה הפתוחה シリーズ内、

[22] 『名詞の分類論（פרק המינים）』で、レヴィータが数える１３種類の名詞の順番は次のとおり：שם העצם, שם הפעל, שם דבר, שם התאר, שם מתגבר, שם מצטרף, שם המקרה, שם היחס, שם הכלל, שם המין, שם נרדף, שם משתף, שם המספר（すなわち、固有名詞、動詞の名前、事物の名前、容姿の名前、強調の名前、他に依存する名前、場合の名前、血縁の名前、一般の名前、種類の名前、同意語、同音意義語、数詞）。下線はメナセ文法の７分類に登場するもの。注 29 を見よ。

[23] Nomen vero substantivum の解釈で、vero を単に「実際、彼らは実体的名前を事物の名前と呼ぶ」と慣用句的に理解することも可能であるが、「nomen substantiae 実体の名前」と「nomen substantivum 実体的名前」のカテゴリーを「事物 res」と同一視して、目に見える事物だけを「実体的な名前」の中身と限定するなら、「魂」「霊」など、目には見えなくても実在すると考えるＪ・キムヒ、また「実体の名前」の例にそれらも挙げるＭ・キムヒの理解とどう整合性をつけるのか？のジレンマに陥るので、その問題解決として、ミュンスターは nomen vero substantivum「真に実体的な名前」という新用語で、目に見える事物だけでなく、目には見えないものも真に存在する（実体的なもの）として含む総合的な新概念を提案したという理解も可能だと私は考える。C. T. Lewis, *An Elementary Latin Dictionary,* Oxford University, 1987, p.911.

[24] 手島のジェンダー論文、前掲書 p.73ff を見よ。英文法の Adjective は属性の概念であって、形容詞には存在は含まれていない。レヴィータのディクドゥークにおいてはשם התאר容姿の名前は、身体（עצם）と場合(מקרה)の結合であり、はっきりと存在が意図される。形容詞のイメージに近い、存在抜きの、属性や様態だけを表す文法概念としては「場合の名前」がそれである。

[25] Alexandre Lorian, "Pierre Ramus et Pierre Martin," in: C. Blanche-Benveniste, A. CHervel, M. Gross (ed.), *Grammaire et histoire de la grammaire, Hommage a la memoire de Jean Stefanni,* L'Universite de Provence, 1988, pp.280-289

[26] Steven Nadler, *Menasseh ben Israel,* Yale University, 2018, pp.26-28

[27] The National Library of Israel(イスラエル国立図書館)ネット上でエッツ・ハイーム所有の『サファ・ブルラー』手書きテキストを見ることができる（検索は、 :שפה ברורה בפורטוגזית ובעברית)。これのオリジナルのレファレンスは以下の通り。Fuks, L and Mansfeld-Fuks, R.G., *Catalogue of the manuscripts of Ets Haim/ Livaria Montezinos Sephardic Community of Amsterdam,* Leiden 1975(Hebrew&Judaic Manuscripts in Amsterdam Public Collections, II) no.326.

[28] メナセとアボアブ二人の文法書が合本された手書き写本（18 世紀）はイスラエル国立図書館（System Number: 990033780180205171）。検索はחבור בדקדוק עברי בספרדיתで

行え。ここからダウンロードも可能である。テキスト・オリジナルの所有とレファレンスは、*Bibliotheca Rosenthaliana,* Amsterdam Netherlands, Ms. Rosenthaliana 725。このメナセ文法の手書きテキストには、ポルトガル語的には単語の綴りで c の代わりに s の方言的な交換が見られる 18 世紀の手書きだが、エッツ・ハイーム所有 17 世紀のテキストではより正確な綴り（c）で確認できる。

[29] メナセが教える 7 種類の名詞の順番は、次の通りの 7 つの種類（固有名詞、動詞の名前、事物の名前、容姿の名前、必要となる名前、関係の名前、数の名前）： שם העצם, שם הפועל, שם דבר, שם התואר, שם המצטרף, שם היחס, שם המספר,

[30] 上記のメナセの 7 種類の名詞の順番は、基本的に、レヴィータの名詞分類リストから取捨選択されたものである。注 20 を見よ。メナセの名詞分類の理解は 7 種類を数えるが、その種類はレヴィータの 13 種類からの抜粋である。メナセの述べる分類の順序も（割愛した種類を取り除いたものとして）レヴィータの順序と一致している。基本的にレヴィータ文法の名詞分類そのままであるだけに、なぜ固有名詞の区別の解説において 4 つの区別を数えるレヴィータ文法から逸脱して、バルメス文法（5 つの区別）にメナセが歩み寄るのかは謎である。

[31] レヴィータ名詞分類のשם הפעל解説で ועוד מי ילך לנו לבקש בכל המקרא לראות אם נמצא ממנו פעל או לא[.....]ומי יגיד לנו כל אלה「さらに誰が私たちのために聖書の全て調べて、それ（名詞）から動詞が派生しているかどうかについて、私たちに報告してくれると言うのか」といっている。まだ聖書の全てを調べ尽くしていないレヴィータにとって、便宜的に、学生を困惑させないために、たとえ動詞の名前の様に見える事例についても、事物の名前と言っておくことが好ましいと、現在の調査範囲から判断している。

[32] レヴィータは、名詞分類の中のשם הפעלの解説で、聖書だけでなくラビ文献にも調査範囲を広げて、動詞から派生する名詞についてのべている。彼の研究スタイルはヘブライ語の時代的な変化も意識する。

[33] Steven Nadler, *op.cit.,* p. 25.

[34] イスラエル国立図書館でのレファレンス検索はספר מענה לשון で行え（System Number: 990020305990205171）。データは公共の使用可能でダウンロードもできる。

[35] 注 8 の手島のジェンダー論文、前掲書、pp.68-70 を見よ。

[36] アクセント記号でタルハー（טרחה）と呼ぶのはスファラディの伝統で、アシュケナジムはメルハーとよぶ。これはレヴィータがアクセント論（טוב טעם）で指摘している違いでもあり、ウジエル文法は、タルハーの名称を用いる。加えて、2 種類のカマツの発音（a/o）の認識もスファラディの伝統である。

[37] Moises Orfali," On the Hebrew Grammars in the Western European Diaspora and the New World", in: Yosef Kaplan (ed.), *Religious Changes and Cultural Transformations in the Early Modern Western Sephardic Communities*, Brill, 2019, pp.431-451.

[38] 引用レファレンスはメナセのものと同じ手書き写本からであるが、もちろんエッツ・ハイーム所蔵のアボアブ著作集（手書き 1728 年）の文法テキストもある。レファレンスは以下の通り。Fuks, L and Mansfeld-Fuks, R.G., *Catalogue of the manuscripts of Ets Haim/ Livaria Montezinos Sephardic Community of Amsterdam,* Leiden 1975(Hebrew&Judaic

Manuscripts in Amsterdam Public Collections, II) no.429.

[39] 語源論と統語論の二部構成でされるグラマティカの伝統はマルティーニ文法（*Petri Martinii Navarii, Grammaticae Hebraeae*）から始まる。そこでは、レヴィータのディクドゥークでみた、固有名詞や名詞分類の関心・議論は割愛されている。このマルティーニ文法の伝統を引き継いだブクストルフ文法（*Johannis Buxtorf1, Thesaurus Grammaticus Linguae Sanctae Hebraeae*）では、名詞分類の解説がわずかに復活するが、その名詞分類と固有名詞についてブクストルフ親子の間で理解は一致していない。特に、息子が父親の文法を改訂した 1663 年版のブクストルフ文法では、名詞は proprium(固有名詞)と appellativum(通称名詞)に分けられる。そして、固有名詞は単体に対しての名前であり、そこには固有の属性が認められるとしている。他方、通称名詞 appellativum については複数形もあり、それは、Substantivum(実体的名詞)と Adjectivum（形容的名詞）の 2 種類に分けられるとする。その二つの区別について、実体的名詞の方は一つの事物の名前には男女いずれかのジェンダーが予め定められているが、形容的名詞の方は男女のジェンダーいずれの選択肢もあるという。ただし、息子ブクストルフは形容的名詞がはたして属性ジェンダー以上の意味、存在とか事物の意味とかを持合わせている名詞であるのか、その説明はしない。

この点で、スピノザ文法の名詞分類（5 章）は、不定詞も分詞も前置詞も副詞も、名詞の範疇に数え名詞 6 種類を提案するのだが、注目に値するのは、その最初に nomen substantivum（実体的名詞）という種類をかかげ、それが固有名詞（proprium）と通称名詞 (appellativum)という二つのサブカテゴリーにわけられると考えたことである。これは息子ブクストルフが固有名詞の唯一性と通称名詞の一般性を最初に大別する考え方とは逆で、全てを実体的名詞という一つのカテゴリーに見立て、その中が固有名詞と通称名詞に分かれるということは、つまり固有名詞も実体的名詞であり、その意味では通称名詞と固有名詞は共に大差なく実体的であるという理解である。しかし、なぜ実体的名詞を二つのサブカテゴリーに分ける必要があるのか？その理由は、要するに、人間の言葉は、実体的に単数性（唯一）の固有名詞と、実体的に複数性（一般）の通称名詞からなり、単数と複数は根本的に違う認識の仕方の概念として分けられるべきという含みがあるのだろう。今までの文法議論では、固有名詞の中身は唯一性なのか一般性なのかで揉めていて、固有名詞と実体名詞の共存は、カテゴリー的に、不可能なアポリアとみなされてきたが、スピノザは、バルメスの様ではなく、レヴィータやメナセの様に、固有名詞を名詞分類の中に含めて考える立場をとりながら、さらに一歩進んで、固有名詞も「実体的名詞」範疇のサブカテゴリーとみなすわけである。それは、まるで、ヨセフ・キムヒの分類の最初の二つを両方とも「実体的」としたミュンスター文法の立場を想起させる。

レヴィータやメナセの名詞分類でいう、容姿の名前シェム・ハトアル（≠形容詞 adjective)、事物の名前シェム・ダバルの区別は、スピノザにとっては複数性の（複数形が可能な）通称名詞としてまとめられる。すべてこれらは複数性の可能な名前であるから、その単数形の意味は、その複数性を基礎にしている。他方、固有名詞シェム・ハエツェムには複数形は不可能である。常に単数である。それゆえに、通称名詞と固有名詞が一つの実体的な名前である点で同じ一つのカテゴリーにまとめられるとき、両者の単数の意味の

違いをどうするのか？そこで、スピノザにこの発想が可能になるのは、それまでの文法学者が複数単数をいうとき「事物（res 物体）」との関係で「実体」を考えてきたことがある。複数と単数の区別を「実体」にも持ち込んで考えるとき、固有名詞の絶対性（単独性）と、論理的なアポリアを覚えざるをえなくなるが、スピノザにとっては、固有名詞の単数は、数えられる「事物」の単数ではなくて、「分離不可能なもの individuum」の「単一でひとつ unum singulare」の意味であった。すなわち固有名詞は、いわゆる数の複数をベースにした単数の事物イメージ（それが通称名詞のイメージ）ではなくて、固有名詞の単数や単一や唯一は、複数性がありえない「インディヴィジュアル individual」という顔の「実体」であると考えた。つまり実体において、一体で分離不可能な「個」こそが、文法的には、本物の単一（シンギュラー）なのであり、それが実体的な固有名詞（nomen substantivum proprium）の中身であり、それは事物（通称名詞）の複数性を細かく分離して単体を求めようとする思考作業から出てくる「単数」ではない。通称名詞は基本的に数の複数の概念であるから、それには複数形があるから単数形もあると理解することになる。スピノザの nomen substantivum とは、それまでのグラマティカやディクドゥークの、事物の単数と複数の延長で考える実体的名詞ではない。それは固有名詞と通称名詞の両方が包括されている概念であり、要するに、「自然」を語るには、固有名詞の分離できない「唯一／シンギュラー」の視点と、通称名詞の分解・分析できる「複数性・総合性」の目線の両方が、人間の言語には与えられているのである。要するに、スピノザの固有名詞の理解は、それまでのディクドゥークとグラマティカの蓄積を踏まえてこそ顕現してくる名詞論のイノベーションでないか？という感想を筆者はもっている。

Summary

Faultlines in Hebrew Grammar Concerning Proper Names:

: Three Grammar Textbooks of the Amsterdam Jewish Community of the 17th Century

By

Isaiah (Izaya) Teshima, Ph. D.

The evolution of Hebrew grammar in the 16th century begins with Christian Hebraists such as S. Munster who translated the Hebrew grammatical works (*Dikdduk*) of Moses Kimhi and Elias Levita into Latin. Through the Latin translation, Christian Hebraists have transformed the medieval Jewish scholarship of Hebrew grammar to be *Grammatica Hebraea*, as understood in terms of Christian perception of Latin or Greek grammars, which deviates from the Jewish version of Hebrew Grammar in many respects.

In this process of transformation, Munster faced a difficulty with the grammatical term שם העצם which could be interpreted in various ways because Abraham ibn Ezra taught the grammatical term to mean "proper name" whereas M. Kimhi thought of as the name of "substance" or "thing". Accordingly, the Latin translation of שם העצם was various from *nomen proprium,* to *nomina substantiae*, *nomen substantivum*, *nomen substantiae,* as they tried to define the nature of "proper name" of human being like Abraham or Mary in distinction to that of "general noun" which also involves complications on distinguishing "thing" from "substance" or "essence".

This is because "proper name" was perceived as "personal being," an individual existence which signifies his or her unique character of the soul that cannot be seen in human eyes. In response to this challenge, Abraham de Balmes, a Jewish grammarian of the early 16th century, considers the proper name as a special category of name to be excluded from the list of kinds of nouns in general, whereas

a Christian Hebraist of the late 16th century, Petrus Martinius canceled the tradition of discussion on the categories of nouns through the Hebrew terms likeשם תאר, שם דבר, שם העצם etc. as meaningless.

The *Dikdduk* of 17th century in Amsterdam can be seen as a special kind of Hebrew grammar for the Jews who had been *converso* in Portugal as deprived of knowledge of Judaism. Isaac ben Abraham Uziel, the grammarian in exile from Fez, gave the discipline of *Dikdduk* to two sons of *converso*, Menasseh ben Israel and Isaac Aboab de Fonseca, who later became Hebrew teachers in Spinoza's time. All those three individually wrote grammar books which certainly had effects on Spinoza and his incomplete grammatical work.

In this paper, I have examined their understandings of nouns in which there is a clear division between Menasseh and Aboab/ Uziel in terms of שם העצם; Menasseh follows Ibn Ezra so that he considers it as proper name in the list of nouns, whereas the master Uziel and his student Aboab following M. Kimhi takes the term to mean the name of "thing". It is noteworthy that Aboab excluded "soul" from the examples while Uziel included it in them like M. Kimhi. As a phase of history of Hebrew Grammar, the 17th century was the time for the Jews in Amsterdam to renew the traditions of old Spanish דקדוק while for Christian reformers to stall *Grammatica Hebraea* as a standard of Hebrew grammar.